

「木は地球を救う」 — 8

細田木材工業(株)

相談役 細田 安治

横山大観生誕150年展

絵画などの芸術には関心が薄いので数えるほどしか大観の画を見ることがなかったが、「木は地球を救う」シリーズを書きだし、木と水と人間の営みの関連を改めて認識していた。そんななかで大観展を知ったのは、『日本経済新聞』朝刊一面のコラム「春秋」600字弱だが、日経のベテラン記者が書く小文が時々刻々の世評を鋭く捉えており筆者は愛読している。このコラムで大観展を観ての感想を見つけた。「生々流転」の紹介である。「葉末に結ぶ一滴の水が、やがて大河となり海へ注ぎ天へ昇る」人の一生を水になぞらえ全長40メートルに及ぶ水墨画とあった。この紹介文の冒頭の言葉「葉末に結ぶ」とあるのは筆者が「木は地球を救う」「木は雨を貯え、山を守り、里を潤し、食を賄い、やがて大河となって人の産業を助け、発展させやがて海にそそぎ、栄養分一杯のバクテリアで魚介類を育て人の食を助け、海は外国に通じ地球上全ての国々との交易を可能にしている。正に木は地球を救うもの。やがて、海は蒸発し雨となって山にそそぐ。この自然の摂理で、水は人生そのものである。との筆者の主張が正しかった。と気が付いた。大観になぞらえるのは、「誠に恐れ多い」ことだがお許しください。

巨匠 横山大観

明治

あまりにも有名な横山大観(1868～1958)明治元年～昭和33年の90年間、だが、大観とは明治から大正、昭和を通して活躍した日本画の巨匠だ。明治26年、東京美術学校のちの、東京藝術大学の一期生「村童観猿翁」を描き最高得点で卒業、関西を経て東京に戻り、在野した恩師岡倉天心、親友菱田春草らとともに日本美術院を設立した。明治36年在野し傷心中の岡倉天心を中国の詩人「屈原」にみたてて発表し話題を呼ぶ。やがて「ぼかし」手法に転じるも「帰帆」が世間から不評、非難を浴び苦境に立たされる。しかしインドへの渡航を経て、はっきりした色彩への岩絵の具、西洋絵の具等を用いた手法に転換、明治40年、美術界の宗派、日本画と洋画、新派と旧派などのジャンルを取り払った展覧会を文部省が第一回美術展覧会を開催した。大観は作品を出品し在野ながら、審査員を務めた。在野中の五浦自宅が火事で焼失したのを機会に東京上野に本境地を定めた。明治44年苦楽を共にした親友菱田春草を病気で失い、大正2年には恩師岡倉天心をも亡くすことになった。大正3年(1914)大観は観山らとともに、日本美術院を設立し次の時代への第一歩を踏み出した。

大正

大正期の大観は、明治末期の中国紀行などからの蓄積を経て水墨技法「水国之夜」などを、岩絵の具、西洋絵の具により、西洋の印象派と南画の筆致が融合したような筆致により第5回文展「山路」、人物表現に濃淡を用いた「五柳先生」などがある。大正時代の様々な表現研究の背景には、同年代と作家と、一回り下の作家との交友があったことで知られている。多様な表現の研究は同時並行的に進められた。



横山大観：水国之夜（1911）

<http://search.artmuseums.go.jp/gazou.php?id=183304&edaban=1>

生々流転（Metempsychosis）

大正12年1923 9月「葉末に結ぶ一滴の水が、後から、後から集まって、瀬となり淵となり、大河となり湖水となり、最後は海に入って、竜巻となって天に昇る。それが人生であろう」との思いで「生々流転」を画いたと大観は述べた。ただし、龍が天へ昇ってそれで終わりではない。水はやがて山間に沸く雲へと転じるのだから、この画卷も振出しに戻って限りなく続いてゆくのである。

大観畢生の作であることは誰もが認める作品は、全長40メートルを越える長さと言うか大きさだ。長大さだ。描かれている筋書きとしてのドラマ、名だたる銘墨から生まれた墨の美しさは観るものを圧倒する。40メートルのガラスケースに収められている名画には、先ず長い行列があり行列は遅々として進まぬ。筆者は行列の最後尾に並び、やっと画の前迄来たがここでストップする。博物館美術館巡りでよく遭遇する風景だが、ここでもまた、それらしき人物がじっと睨んでおり、何分も動かない。これでは動くはずがない。鑑賞者達は多かれ少なかれ同じ思いを持っているはずだ。行列の「追い越し」はルール違反だ。鑑賞者達はこのことは勿論承知だが、たまりかねて仕方なく追い越すことになる。画の前でまるで自分一人で独占しているような人種は人の迷惑を考えない。自分さえよければの「エゴイストたちだ」もっと長い時間見たければ、行列の流れに沿って進み、並び直し何度でも見る。これがルールではないかと心得る。読者の皆様は如何でございましょうか。おっと横道へそれてしまった。

最大級の賛辞

この作品には、さまざまな賛辞が寄せられた。大正13年11月1日の大阪朝日新聞に、当代随一の美術批評家春山武松によれば「東洋絵画の真髓を攫み、またそれを、根本思想なる老莊哲学に反映せしむる。」とし、さらに加えて名宝とされた雪舟の「四季山水の図巻・山水長巻」をたとえに挙げている。東京朝日新聞大正12年12月25日付きに寄稿した仲田勝之助は「芸術界の一大収穫」と大観の個性を認めつつ、そ

こに中国絵画の南北二宗と、やまと絵が融化した姿を見ている。批評の言葉としては、どちらも絶賛に等しいものだ。また、この作品には大観独特の表現がなされている。この「生々流転」にも、狙いすました奇妙さが隠れていることを見逃したくない。ひとつは、人物の表現、ヨロヨロとした不器用な線がかたどられた登場人物たちは、なんとも、とぼけた味わいを醸し出している。かの夏目漱石が「瀟湘八景」^{しょうしやう}に対して「変に無粋で無頓着な所も…」と評した。二つ目は、小下絵画の岩組が奥行きまで書かれているが、本画では「片ぼかし」に発展形で表現されている。ここで大観が優先したのは説明的に書くのではなく、コントラストの強いようにすることで、絵画としてきびきびした印象を強めることだった。三つめは、画卷の最後のほうで河は海に注ぐ。そこから始まる海は岩礁もなくなって海面だけとなってから、およそ4メートル続く。全長401メートルの実に10分の一を使っている。この長い海原^{うなばら}には三角波だけが延々と描かれ、暗がりの中にほのかな明るさが点滅するだけだ。しかし、この4メートルがクライマックスの訪れるまでの「待ち」に時間を用意する。奇抜であるが巧妙な仕掛けだ。この三つの表現が、大観の「人を驚かせてやろう」と言う若いころの大観の企みを感じられる。また、また光や空気を感じさせる水墨的表現もそれまでに培ってきたものだ。それらが、壮大なスケール、遠大なテーマに結びつき「生々流転」は大観畢生の作となったのである。

(参照、横山大観展の冊子より抜粋)

この「生々流転」とも筆者のような凡夫には、ほんの入り口に手をかけた程度の理解しかなく、お伝えできる段階に至っていない。お伝えしたいことは、「生々流転」は、人の人生とイコールであり、また我々「木材屋」も、木は水を運ぶ重要な中継機能を果たしている。木材は誇りをもってこの激変の時代を、木は地球を助けている。山で水を貯え、流れをつくり、鎮守の森をつくり、人の食を潤す、大河となって、沿岸の物流を助け魚介類を育て外国へ繋がる、強大な海の水の通路。水の貢献はほとんどすべてが木を通して行われている。「木材屋」の皆さん自信と誇りをもって進もうではありませんか。

続く